

2019/10/20

テーマ「写真表現の楽しみ」

パネラー ズン・シ・クォン(韓国江原道春川市在住写真家)
福島多暉夫(米子市在住写真家/米子市写真家協会顧問/JPA 理事)
小矢野貢(北栄町在住写真家)
林原 滋(琴浦町在住写真家)

コーディネーター

計羽孝之(倉吉市在住版画家/倉吉文化団体協議会会長)

2019 進行案

コーディネーターのあいさつ⇒シンポジウムの目的について

韓国江原道写真作家協会の鄭時権氏^{ズン・シ・クォン}をお招きし、倉文協所属の写真作家たち及び県内写真作家と、「写真表現の楽しみ」をテーマに意見交換会を行います。現代の最先端写真界では、現代美術の範疇で語られています。しかし、アートとしての写真は混沌の中にあります。そこで今回は、写真が誕生して以降、一体何を撮ってきたのか、その流れを反芻し、現代の「写真は創る時代」の写真表現の楽しみ方を模索してみたいと思います。

基調提案⇒計羽孝之／倉吉文化団体協議会 会長 (15 分間)

Landing Time 15min

15 分程度で要約して話す。パワーポイント使用。

写真の歴史を俯瞰します／①風景写真の時代②旅行写真の時代③芸術的直観力の時代④リアリズムの時代・⑤芸術写真の時代⑥リアリズム脱却の時代⑦フォト・ジャーナリズムの時代⑧機械の時代⑨イメージの時代⑩パーソナルの時代⑪写真は創る時代

パネラーの自己紹介⇒各自 5 分 (20 分間)

ズン・シ・クォン氏(江原道写真家協会)⇒花火を撮る
福島多暉夫氏(米子市写真家協会会長) ⇒私の風景写真に求めるもの
小矢野貢氏(北栄町在住写真家) ⇒オーロラを撮る
林原 滋(琴浦町在住写真家) ⇒風景を創る

① シンポジウムの流れ

(1) 写真の機能を活かした画像づくり

(パネラーの福島氏が発言 5 分)
(パネラーの小矢野氏が発言 5 分)
(パネラーの林原氏が発言 5 分)

(15 分間)

Landing Time 50min

(2) 写真家の独自表現の世界

(パネラーのズン・シ・クォン氏が発言) (5 分間)

Landing Time 55min

(3) 写真でしか出来ない表現

(パネラーの小矢野氏が発言 5 分)
(パネラーの林原氏が発言 5 分)
(パネラーの福島氏が発言 5 分)
(パネラーのズン・シ・クォン氏が発言 5 分) (20 分間)

(4) 写真を撮る楽しみ

(パネラーの福島氏が発言 5 分)
参加者を交えたフリートーク(15 分)

(5) まとめ⇒計羽孝之氏 (5 分)

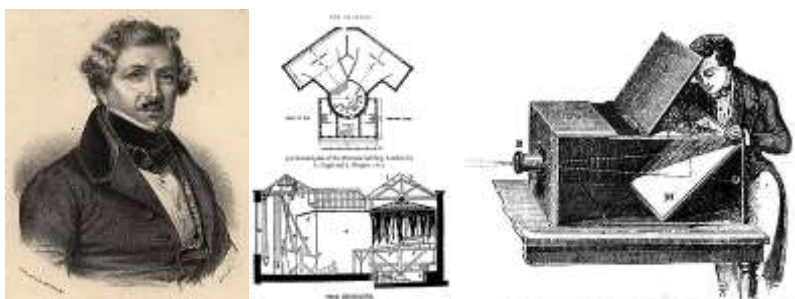
基調提案

2019 年度写真シンポジウム基調提案

計羽孝之

今年は、写真が発明されて 180 年目に当たる。1839 年に※1 ダゲールの写真がフランス科学アカデミーで発表され、一気に時代の最先端科学の雄となった。それは、科学と芸術の接点から生まれたのが現代のカメラの原型であった。写真の仕組みを作ったダゲールは「自然に自己を複製する力を与える、科学的、物理的方法」だと言っているが、科学と芸術という二面性は、私たちを無限の多様性と神秘性へといざなった。写真という視覚を決定してきた求心的なイメージは、現代では電子メディアに移行していった。20 世紀初頭から、写真の意味とその特性を追求していた歴史が、電子メディアとの遭遇により、新しい冒険を試みるようになった。しかし、温故知新に倣って、私たちが生きてきた視覚体験を追いながら、未知の写真表現の楽しみを模索してみたい。

※1 史上初めて美学的な写真技法を完成した人物



写真の歴史

写真という仕組みは、誰でも画家になれる装置として「カメラ・オブ・スキャラ」(ピンホール・カメラ)の出現から始まった。これは、ルネサンス期の透視装置の発展形であり、絵画デッサンの補助手段として使われていたのである。あの有名な「フェルメール」も使っていたし、カメラ・オブ・スキャラで得られる画像を、何とか定着させる方法の研究でカメラの誕生となった。その定着法を見つけた最初がアスファルト板に画像を定着させたのが「※2 ニエプス」であり、その後を引き継いだダゲールによって、ヨウ化銀を使って恒久的に画像を定着させたのだ。

この技術を使って写真を広めたのは、実景以上に美しいジオラマであった。そして、誰でも金さえあれば個人的に買えるロマンティック・マシーンになったのである。そして、パリでは肖像写真館が大繁盛した。やがて風景写真の時代を迎え、絵画的光景が写真の中心となる。当時の写真の意義は、「今そこにあるという現在性の問題、そして、見るという行為そのものの魅力」がもてはやされ、視覚そのものが主題となったのだ。それは、「見る」「描く」が「光で描く」と言う写真が生まれたのだ。そして、当時はまだ写真の中に「何らかの意味を求めたり、自己の意識を考えたりしなかった」のである。

※2 世界初の写真画像を作った

旅行写真家の出現



冒険心にあふれた写真家たちは、遠くの異邦を見たいという欲求を満たすために、カメラを持って冒険旅行を目指した。当時のカメラマン「※3 デュカン」は、「写真は、大した事ではない、機材一式をどう運ぶかが問題だ」と言ったが、やがて 35mm カメラの出現で、写真は万民のものとなった。しかし、デュカンの「東方写真集」を見たあのボードレールは、写真家に「あなたは何を見たのか？」と問いかけた。ファインダーの向こうに何を見、その光景に何を感じたのか？との問いが 100 年前からあったのだ。それは、現代にも通底するものがある。それは、写真家自身のスタンスにまつわる根源的な問いであり、ファインダー越しの世界との関係性を、問いかけているのだ。

「写真の理論はたやすい、一目でどうすればよいか理解も得られる。しかし、光に対する感覚は学ぶことが出来ない。芸術的直観力が必要、直接的なものの把握なしには写真を撮ることはできない。」写真に描く主題を、被写体を本能的に認識するのは極めて難しい。※4 キャメロンは、瞬間性や臨場感を拒み、「写真はリアルでなく、イデアルであり、理想主義である。」と言っているが、それは歴史的人物のポートレートで実証された。

当時の写真家は、画家出身が多かった。※5 ドラローシュは、写真が発明されたとき「今日から絵画は死んだ」と言っているが、それを契機に美術の歴史は大きく変わっていくのである。

写真は瞬間をとらえたものだけではない。写真の初期は感度が低く長い露光時間が必要だったため、写真は図解的になった。その後、カメラの進化は、その光線のつかの間の表現や瞬間的な効果が得られるようになるのだ。そして、見えないものを観えるようにする新しい表現への万能性を発揮し始めた。

※3 19 世紀の旅行写真家 ※4 イギリスの写真家 ※5 フランスの歴史画家



画家たちと写真

写真は究極的な写実主義であり、画家たちは自分たちの絵画を考え直さざるを得なくなった。画家たちがデッサンの代用とも考えて利用した写真は、アングルやドラクロアによって利用され、絵画の中に写真を呼び込んで行った。そして、その後の画家たちに受け継がれることとなった。

リアリズムについて

絵画でいうリアリズムとは、自然の欠陥をカバーすることであり、それは、リアルというよりイデアル(理想化)かもしれない。クールベは、イデアルを否定して、ありのままのリアリズムを写真のようにと主張した。マネは、「オランピア」において、現実世界の生きた体験へと引きずり込んだ。そこには、力強い存在感や現実性があり、現実の生身の女の肉体が横たわっているのだ。それまで、ヌードは、見る者の快樂や欲望のためのものであ

り、女性の持つ官能性が基本であったのだ。それが、写真という人間業では到底まねのできないリアルな描写マシンの出現で、それまでの絵画的スタンスが崩れていったのだ。画家たちは写真の特性をよく理解し利用した。その特性とは、画像が持つ視覚性(平面性、瞬間性、レンズの性質や収差、そこから得られる遠近感や物質感)が、現在性を表していることを認識させるのだ。



芸術写真(ピクトリアリズム)の定型化

ボードレールは、「写真は何一つ創造することも、理想化することもない。写真(鏡)の冷たさと、明快さは持つが、考えることをしない。ただただ精密さで風俗を写しているだけ。」これに対して※6ロビンソンは、「写真は科学ではなく、自然の対象を再現する芸術である。」とし、ピクトリアリズムの原点を示した。そして、合成や修正による写真表現で、写真芸術化運動を繰り広げたのだ。※7エマーソンは、写真と絵画の違いを正確に認識し、科学的法則にのっとり、その延長線上に新しい芸術の概念を切り開くべきと主張し、自然主義写真の概念を作り上げた。 ※6 初期モンタージュ写真の代表格 ※7 イギリスの写真家



写真の目を自覚する

20世紀初頭には、空中写真、連続写真、顕微鏡写真、多重露光写真、赤外線写真、MR写真等、映像表現の可能性が飛躍的に拡大した。

人間中心のリアリズムからの離脱

人間の視覚体験は、人間の眼ではなく、機械の眼が映し出すことに気が付き始める。つまり、「機械の眼のリアリズム」が写真表現の世界となるのだ。機械の眼とは、物事の本質的な立場を発見し、客観的な視覚の形態となる。絵画とは明らかに違う別の表現方法であり、芸術の新しい分野となったのだ。

視覚のバリエーションについて

- ① フォトグラム(光による形態を抽象的に視る方法)
- ② ルポルタージュ(事物の外観を正しく定着させる方法)
- ③ スナップ・ショット(短時間の運動を定着させる方法)
- ④ 時間を引き延ばす(長時間露光させる方法)
- ⑤ 写真用具によって強調させるもの(フィルター、鏡、現在ではPCの現像ソフト)
- ⑥ レントゲン等で透視するもの(X戦にとどまらず超音波画像など)
- ⑦ 機械的モンタージュ(多重露光など)
- ⑧ 歪曲されたもの(光学的ジョーク、パソコンによる変形)

フォト・グラフィズム



1925 年エルマノックス小型カメラの発売(ドイツ製のカメラ)



ライカ

1928 年 35mm カメラ「ライカ」の発売(ドイツ製のカメラ)

ドイツで、フォト・ジャーナリズムの方法論が確立され、ルポルタージュ写真が報道写真の方法となる。つまり、写真は、時代の目撃者となる。

アメリカン・ドキュメンツ

社会記録とは、写真で社会批判をすることであり、社会的良心がそのスタンスとなる。写真家たちは、主題についてよく知り、その主題の意味と環境との関係を見出すことが重要だと考えた。つまり、写真による社会論文を書くに似ている。同じ手法で風景写真を捉えたり、スナップ・リアリズムがもてはやされたりした。

フォト・ジャーナリズムの時代

そんな中で、1936 年に「ライフ」誌が創刊され、1955 年には下火となる。「ライフ」とは、生活を見るために、世界を見るために、事件を確かめるために、貧しい者と富んだ者を見るために創刊したと言われる。※8 マグナムの写真家集団が生まれる。

※8 世界を代表する写真家グループ

機械の純粋性

カメラという機械の眼は、人間の意思や思い込みといった要素を全く持たない新しい暗示的な精神作用であると言える。写真の直接性や即物性の発見があり、その機能を十全に生かした。※9 ウェストン(正確な描写で、形態の生命を捉えた)や※10 アダムス(風景を超越的な光景とした作品)は、完璧な観念へと直感的に導くのである。つまり、写真によって自然の本質を表しているのだ。写真を通して、自然宇宙と人間の新しい関係を成立させたのだ。

※9 アメリカの写真家

※10 自然をドラマティックに写したアメリカの写真家

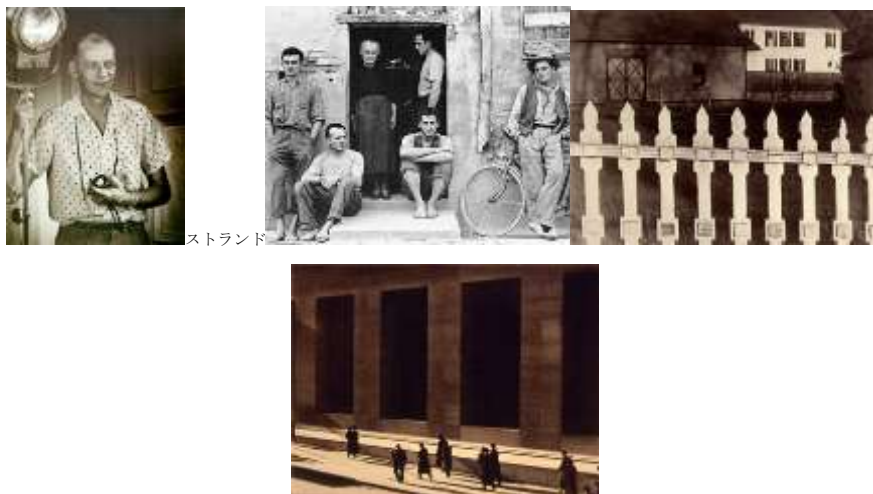


イメージの直接性

「写真家は写真に自己の感情を刻み付ける創造者でなければならない」といったのは※11

ストランドである。そして、主観的写真として、人間を通した個別的な写真(個々の写真に様々な観念やテーマがある)を主張したのである。人間の精神を、写真表現を手段として見えるようにするというものだが、この考え方もすぐに廃れていく。そして、1960年代には、時代の現実と個人の現実を、共に内包する新しいビジュアルとして新しい写真の方法論が浮き上がってくるようになる。これが、パーソナルな視点を持った写真というわけだ。

※11 アメリカの写真家、20世紀の一芸術形式として確立した



パーソナルな視点

1972年、「ライフ誌」が廃刊され、フォト・ジャーナリズムが大きく後退していった。つまり、写真が公的(おおよけてき)な、社会的な威力を失っていったのだ。写真家自身が現実や時代の問題に取り組めなくなったのだ。無作為に撮られるスナップ・ショットは、肖像権に抵触し、無分別なタブロイドは社会的な癌とみなされたりする。写真は私的で、日常的なものになっていき、写真はグラビアから抜け出し、美術館や画廊に進出するようになる。そんな中で写真家たちは、「心理的な問題」「内面的な描写」を写真で試みるようになっていった。

写真は MAKE の時代へ

1980年代より、「写真は撮る(TAKE)時代から、創る(MAKE)時代へと移行していった。1970年代までを客観性と主観性からなる球体だとすれば、1980年代は、様々な境界線が不明瞭になり、様々な表現のスタイルとそのアプローチが交差した、不思議な物体となりつつあった。不思議な物体は、現代にまで続くものとして、写真家の発想の源泉は、社会や自然、現実や人間といった奥行のあるものではなくなった。TV、動画、インスタグラム、広告、絵画と言ったイメージに近いものかもしれない。今こそ、表現形式の問い直しが必要だが、必要な時かも知れない。現代では、今まで抱いていた写真に対する考え方とは異なる、新しい構造を持つものを目指さなければ、時代を逆流する似非写真、認否不可能な芸術に翻弄されることになるのではと危惧している。



報告 令和元年度

「芸術たのしみ広場」報告書

10月20日（日）午後1時30分より、倉吉市文化活動センターに於いて、県文連からの委託事業「芸術たのしみ広場」を倉文協が取り組みました。その概要を報告いたします。

○シンポジウム

「写真表現の楽しみ」



当日午後1時30分より、ズン・シ・クォン氏による写真展のギャラリートークがあり、その後、鳥取オペラ協会の協力でミニコンサート（出演／ソプラノの鶴崎千晴氏、ピアノの兼田恵理子による日本歌曲が披露されました。鳥取オペラ協会を代表するソリストであり、高い芸術性を感じさせる演奏となりました。

その後、会場移動し、「芸術たのしみ広場」シンポジウム～写真表現の楽しみ～に入りました。県文連会長『小谷幸久』と担当団体、倉吉文化団体協議会会長の計羽孝之が挨拶し、シンポジウム参加のパネラーが紹介されました。

韓国江原道春川写真家協会会長「ズン・シ・クォン」氏、米子市在住の写真家「福島多暉夫」氏、北栄町在住の写真家「小矢野貢」氏、琴浦町在住の写真家「林原滋」氏の4氏。

シンポジウムのコーディネーターは倉文協会長の計羽孝之が担当しました。

□シンポジウム・スタート

コーディネーターの計羽孝之氏より、シンポジウムの目的について次のように述べた。

「韓国江原道写真作家協会の鄭（ズン）時権（シ・クォン）氏をお招きし、倉文協所属の写真作家たち及び県内写真作家と、「写真表現の楽しみ」をテーマに意見交換会を行います。写真は現代最先端写真界で、現代美術の範疇で語られています。しかし、アートとしての写真は混沌の中にあります。そこで今回は、写真が誕生して以降、写真家たちは一体何を撮ってきたのか、その潮流を反芻し、現代の「写真は創る時代」の写真表現の楽しみ方を模索してみたいと思います。」とのことでした。そして引き続き、基調提案が行われました。

[1]基調提案

コーディネーターの計羽孝之氏より、写真の黎明期から、現代に至る写真の歴史を俯瞰した提案が、写真家たちはその時代時代に、社会の要請や時代背景で何をテーマとして撮影して来たのかを、「**二の時代**」に区分して説明されました。それは①風景写真の時代②旅行写真の時代③芸術的直観力の時代④リアリズムの時代・⑤芸術写真の時代⑥リアリズム脱却の時代⑦フォト・ジャーナリズムの時代⑧機械の時代⑨イメージの時代⑩パーソナルの時代⑪写真は創る時代とし、現代写真が混沌の世界に至った軌跡を説明されました。

[2]パネラーの自己紹介を兼ねて、自作世界を語っていただきました。

- ・ズン・シ・クォン氏は「花火を撮る。」について、撮影のエピソードを交えた技法の紹介。
- ・福島多暉夫氏は「私の風景写真に求めるもの」について語っていただきました。

- ・小矢野貢氏は「オーロラを撮る」ためのノウハウを、具体的に語っていただきました。
- ・林原滋氏は「風景を創る」とし、なんでもない風景を絶景に撮るためのスタンスを語っていただきました。

[3]写真の機能を活かした画像づくりについてパネラーに語っていただきました。

現代のデジタルカメラは、「白黒写真の時代」の、暗室作業をマスターするのに長い年月が必要であったが、現代ではITが組み込まれたカメラロボットが自動的に処理するため、誰でも美しい写真が撮れる時代になっていること。撮影機能の進化が、新しい写真の視点を開いて行ったこと。フィルム時代には考えられなかったような画像が取れること。それらのカメラの機能が進化したため、写真芸術は写真と言うテクニックを使い、何を考え、表現者自身が何を主張し、何を作品として昇華させるかの問題になっているとのことでした。絵画作品(油彩画)においては、基礎技能(デッサンのスキル)がなければ、そもそも絵は描けないが、写真の場合はその基礎技能の部分を全てカメラがやってくれるため、誰がシャッターを押しても、美しい写真は撮れる時代でもある。そのため、単に機械(カメラ)が作り出す画像に「おんぶにだっこ」の写真が氾濫している。つまり、進化した機能を使った写真だけでは、作品にならないとの事です。では、どうすれば写真が作品として表現できるようになるのかとの問いがあり、その回答としてパネラーに各自の方法論をお聞きした。

[4]写真家の独自表現の世界及び写真でしか出来ない表現について語っていただきました。

・**小矢野氏**からは、もともと実用として、伝えるべき農業技術を農家の皆さんに伝達するという目的で動画撮影を始めていた。そのため、云いたいことを如何に伝えるかのテクニックとして、カメラワークを学び、伝達項目の整理(5W1H)をし、それに準じたカット割りを考え、遠景撮影・中間・近景で何を主張するかシナリオ作りをして来た。そして、動画表現の時間を圧縮し、数枚の写真で表現する技法の模索、そして一枚の静止画にすべての主張をまとめ上げる写真の世界に入っていったと話された。

更に、近年取り組んでいるカナダのイエローナイフでの撮影秘話を話して頂き、写真撮影の喜びを示されました。イエローナイフは、まさにオーロラの聖地であり街の明かりが全く届かない場所にあるため、展望が開け、どの方向からオーロラが出現しても美しく見ることが出来るとの事です。

・**林原氏**は、風景写真の専門家ですが、誰でもが求める絶景を撮るのではなく、自分の住む町内外の平凡な風景の中に、自分の琴線に触れる風景を見つけ出し、その美しさを強調するための撮影工夫が総てとの事です。その撮影工夫の一端を紹介されましたが、思いもよらないもの(懐中電灯を3種類等)であり、撮影エピソードを聞くとなるほどと得心の行くものでした。例えば、夜陰の中に桜の花だけが白く映っている幻想的な光景も、名所にある夜間照明とは全く異なる美しさを表現できているものです。このような写真は、まず、何を表現したいのかのテーマがあり、その表現を可能にするため何をどうするかを試行活動があり、幾度となく撮影グッツ(懐中電灯+色フィルター)の模索の後に表現したかった画像を作り上げていくとの事です。現像ソフト(フォトショップ)に頼らない撮影姿勢との事です。

・**福島氏**は、写真歴60年以上の大ベテランであり、フィルムの白黒時代から、カラー時代、そしてデジタル写真時代の最先端を歩み続けた方であり、写真誕生から180年の流れを熟知した方です。そして、現代の写真技術は、表現力を高めるための道具に過ぎないとのことであり、写真表現をするのは人間であり、機械に振り回されるのではなく機械を如何に操るかが重要と、写真撮影の基本姿勢が示されました。したがって、パソコン上で現像ソフトを使っての作品作りは常道であり、そのスキルが問われる時代との認識も示されました。という事は、写真は様々なテクニックの習得以前に、芸術表現者としてのリテラシ

一(様々コミュニケーション、例えば、ボディランゲージ、画像、映像等を適切に読み取り、適切に分析し、適切にその媒体で記述・表現できること)が問われると力説された。つまり、写真作品はシャッターを切って偶然に生まれるものではないという事であり、リテラシーを得るためには、様々な芸術作品に接したり、大袈裟に言えば自分の人生をどのように生きるか、美しい人生を如何に描くかに関わっているとの事でした。

ともあれ、現代では写真が氾濫している。単にシャッターを押せば写真は出来るが、それは時の記録に過ぎず、思い出を凍結させる記念写真であったりする。そもそも、写真は全て記録であり、それをどう扱うのかで、芸術の範疇に入ったり、商業媒体になったり、コミュニケーションツールになったりする。写真そのものを楽しむ風土は世界中に氾濫し、新しい社会秩序を構築したりしている。そんな大げさでなくても、個人的に写真を楽しむ方法は沢山ある。

[5]写真を撮る楽しみについて、パネラーの福島氏がまとめてくださいました。

スマホの普及は、市民のコミュニケーションの最も有力なツールとして普及してしまっただ。これまで人間が持つコミュニケーション能力は、過去のどんな時代よりも強力な武器を持ったことになる。スマホのカメラ機能(写真や動画)の進化は、スチールカメラを遥かに追い越し、プロ用カメラの機能に限りなく近づいた時代である。そんな中で、写真を撮っては、写真芸術に近づけようと考えたり、自分の表現だなどとしなくても、写真は十二分に楽しむことが出来る。現代は、なんでもありの混沌とした時代であり、その全ての楽しみに、全ての人に価値ある楽しみだと思える。社会に対して表現活動する場も、ギャラリーでなくても、様々にチャンスとその場が拡大している。インターネット上のギャラリーは大繁盛だし、フェイスブックでは万人に開放された宇宙的空間である。おおいに、写真を楽しまれることを期待しているとの事です。

[6]コーディネーターの計羽氏が、シンポジウムのまとめとして次のように話し、終了した。

私たちは誰に認められようと、認められまいと「芸術家としての生き方をすべき」です。芸術とは哲学の一分野であり、人間が如何に美しく生きるかを模索することが重要なのだ。私たちは毎日の生活の中で、常に人生の選択を強いられ、悩みながら決定し続ける生活をしています。良い選択かどうかの判断よりも、まず選択し続けることが大切であり、それこそが、人生になるのです。ですから人生にプロフェッショナルもアマチュアもないのです。それと同じように、芸術家に玄人とか素人との線引きは不要なのです。しかし、芸術家としての生き方(より美しい生き方を求める事)をしない人生は、「死に至る病」(キルケゴール)だと言われます。事の大小や様相の異なることは多々あっても、常に拮抗する対抗軸を持って、二つの対立概念をより高次の概念によって、統合する生き方をすべきだと、短絡的に述べ、写真を作品として仕上げるからこそ、「写真を撮る真の喜び」ではないかと結論されました。

当日の参加者は合計 4名 ミニコンサート 6人 シンポジウム 1人でした。

○アンケート回答に見る事業実施の成果

「写真はそのままのモノばかりと思っていましたが、そうではないと初めて分かりました。」とのアンケート回答がありましたが、写真が作品となり、芸術表現が可能な世界があると理解していただけた。そして、基調提案に示された写真に求められてきた歴史的背景について、初めて知ったと、写真歴 60年のベテラン聴衆からのことばで、このシンポジウムを開催した意義があったと感じました。さらに、写真家たちが色々な思いを持ち写真表現をされていることが理解できたとの意見、「パネラーそれぞれが、異なる姿勢で写真に取り組んでおられるのが、とても参考になりました。『写真とは何か、どう取り組んでいくのか』を考える素晴らしいシンポジウムでした。」とのアンケートコメントが総てを語っているとと思いました。当日のミニコンサートの開催についても「音楽との組み合わせは良かった。」とのアンケート回答がありました。

た。」との評価もいただきました。

最後に福島氏が『「写真は記録、思い出。」正にその通りですね。その写真も素晴らしい。』との言が、写真の楽しみ方を如実に物語っていました。

○課題として

何と言っても参加者の少なさです。広報にはかなり努力はしましたが、写真愛好家ではなく写真作家を対象としたため、内容が一般受けしなかったことが、動員数減の原因だと思いました。しかし、写真を撮るだけで「写真作家」然として、写真に自己を反映させられないのに気が付かない愛好家の多さには、このシンポジウムで扱う内容を学んでいただきたいとの思いがつのります。パッと見で、一瞬で面白さが伝わるもの、インパクトがあるものを追いかけてばかりせず、じっくりと見ていくことで様々なことが発見されるものを求めてほしいものです。現代の写真家は、様々な技術を工夫し、それを使って自分にしか撮れないものを追い求めているのです。テクノロジーの進化と共に写真は進化してきた歴史を知り、時間や記憶を持つ、深い意味を明らかにしたり、新しい物語を描いたり出来るのが現代の写真ではないのでしょうか。

今後は、県域写真団体と共催するなどし、必要な人に必要なリテラシー情報を届け続けることの重大さを噛みしめています。